人間文化論叢　第8巻　2005年

外国人妻の世帯内ジェンダー関係の再編と交渉

——農村部在住韓国人妻の事例を中心に——

柳　蓮　淑*

Reorganization and Negotiation of Gender Relation at Households with Foreign Wives：

Focused on Korean Wives Living in Rural Areas

YU Yon-Suk

abstract

The present study examined the process of negotiation and reorganization of gender relation at households with Korean wives, who had international marriage, in rural areas in Japan, and found three points as follows.

First, Korean wives living in Japan are characterized by high age, high academic qualification, work experience and urban origin. In addition, factors that made them to make the international move to Japan was usually related to marriage before moving to Japan (divorce, separation by death and becoming an old maid) . Second, many of the Korean wives had experienced conflicts related to their status at the household and gender relation just after the international marriage to their Japanese husbands. Third, as their life in Japan was getting longer, many of the women tried to [negotiate] with their suppressors and [reorganize gender relation] in order to enhance their status at the household. Negotiation methods are largely divided into two. First, [passive negotiation] performs [the role of wise daughter-in-law] at home and to [point out things to be corrected] by the parents-in-law. Next, [active negotiation] overcomes conflicts through colliding directly with the husband' s parents. However, their efforts are not limited to collision with the opposites but also directed to the development of their own world outside the home including social/economical independence through own business or employment.

Key words : korean wives, reorganization of gender relation, passive negotiation, active negotiation

1　はじめに：問題の所在と研究の意義

本研究は国際結婚を通じて日本の農村部に在住している韓国人妻の世帯内ジェンダー関係の再編過程に焦点を当てることによって、トランスナショナルなアクターとしての家族生活の展開およびその意義について、理論的な考察の可能性を提示することを目的とする。

ジェンダー視点に立った女性の移動に対する研究は、主に移動による女性の社会的地位の変化に焦点が合わせ

キーワード：韓国人妻、ジェンダー関係の再編、消極的交渉、積極的交渉

＊平成10年度生　人間発達科学専攻

られてきた（小ヶ谷 2000:99）。1984 年にM．モロクワシチが編者となった *International Migration Review* で「女性と移動」特集号が刊行されて以来、研究動向としては、主に二つの方向性が認められる。ひとつは 70 年代以降の新国際分業下の世界的な「労働力の女性化」を支える女性労働力の位置づけに関する研究であり、いまひとつは主に女性に多く見られる家族再結合と婚姻など一般に経済外と考えられる要因に基づく移動や女性の性の国際的商品化に伴う移動をめぐる研究である（伊藤 1998：60）。これらの研究は、移動における送り出し国または受入国における世帯と家族の役割、また移動がジェンダー秩序に与える作用に注目してきたといえよう（Marta Tienda & Karen Booth 1991；Hondagneu-Sotelo Pierrtte 1994；伊藤 1998）。

M・ティエンダらは移動が女性の地位に及ぼす効果について、「改善」、「悪化」、「再編された非対称性」という三つの形態の展開可能性があると述べるが、全体的には女性の移動によってジェンダー不平等の特定側面が改善されることはあっても、ジェンダー間の格差と非対称性は全体的に維持される傾向にあるという（Marta Tienda & Karen Booth1991：51-72 ＜伊藤 1998：63 から再引用＞）。このようなティエンダらの議論に対して伊藤（1998）は、移動によって経済的背景が変わる状況下では女性の位置を規定する条件が根本的に異なるため正確な比較が不可能であるという。そこで移動によって女性が「解放」されるか、もしくは「従属」が深まるかという二者択一の代わりに、「ジェンダー（秩序）の再編」というスタンスで変化を分析する必要があると指摘する（伊藤 1998：63）。

本稿はこのような伊藤の分析視点を援用しながら、農村に在住している韓国人妻の世帯内ジェンダー秩序の変化過程について、結婚直後から現在に至るまでの過程を中心に考察する[1]。先述したとおり、「ジェンダー関係の再編」という議論はもともと、家族として移動する過程において送り出し国または受入国の世帯と家族の役割、ジェンダー秩序の作用に主に焦点をあわせてきた。また、最近注目されているトランスナショナリズム[2]についての研究は、1990 年代初頭には移民の主体性構築の説明要因を政治、経済、あるいは社会的な点に複眼的に求めているが、1990 年代後半からは女性のグローバルな動きを捉えるのに政治・経済的な要因にとどまらず、婚姻による移動、ジェンダー観に起因する問題も視野に入れるようになった（Constable1997；鈴木 1998）。

このような最近の国際的な研究傾向を考え合わせたときに、日本に在住している外国人妻の世帯内のジェンダー関係の再編過程についての分析が必要となってくる。国際結婚のために来日したアジア出身外国人妻に対する今までの研究は主に韓国と日本の社会学者、フェミニスト、活動家を中心に実態調査の立場から議論されてきた[3]（宿谷 1988；佐藤 1989；黄達基 1993；桑山 1995；中澤 1996）。近年では、ニューカマー外国人の増加による日本社会の文化変容の可能性に焦点を当てた研究（渡辺 2002）や、日本における移住女性の主体的な生き方に焦点を合わせた研究（鈴木 1998；渋谷 2002；伊藤 2004；小ヶ谷 2004；柳 2006）の蓄積も多くなってきたが、後者においては、どちらかといえば都市部に居住する移住女性を対象とした研究が多い。日本在住外国人妻に対する最近の研究が彼女たちの主体形成に焦点を当てて議論されてきたとはいえ、韓国人妻に限ってみるとまだ課題も少なくない。すなわち、外国人妻に関する先行研究の多くはフィリピン人妻が対象で、フィリピン人妻より多くを占めている韓国人妻についてはアジア出身女性の一部として扱われるにとどまり、彼女たちの国際結婚に至る背景や日本での生活過程にまで踏み込んだ内容はきわめて少ない。

こうした点を踏まえ、本稿では、伝統的なムラ社会の中で言語や文化に適応できずに、ムラの因習に抑圧されることによって時には人権さえも剥奪される（仲野 1998：93）[4]、という従来のステレオタイプ的な「農村外国人花嫁」像を相対化するための論考を進める。このような観点から韓国人妻たちの日本での生活過程と夫や夫の家族との「交渉」過程に着目し、世帯内におけるジェンダー関係の変容に注目する[5]。より具体的に、1）国際結婚で移住した韓国人妻にとっての来日の意味、2）結婚初期における韓国人妻の世帯内での地位と嫁姑関係を含めたジェンダー関係、3）その後の日本での生活展開で韓国人妻がどのように夫や夫の家族と「交渉」し、世帯内外のさまざまな場面でジェンダー関係を再編しつつ、自らの地位を向上させようとしたか、の 3 点に要約される。

2　調査方法

本研究のための調査は、1980 年以降韓国から山形県地域に日本人との国際結婚のために来日し、現在も当地域に居住している韓国人妻を主たる対象とし、二回にわたって行った。一次調査は 2003 年 2 月 7 日から 16 日にわ

たり、主に、①各自治体実務担当者への面接調査、②行政主導による外国人妻関連行事への参加、③26名（韓国人妻22名とその夫4名）に対する面接調査を行った。二次調査は2005年1月8日から13日にわたり、韓国人妻60名を対象としたアンケート調査[6]と、24名（韓国人妻16名[7]、日本人の夫6名、姑1名、舅1名）を対象とした面接調査を行った。

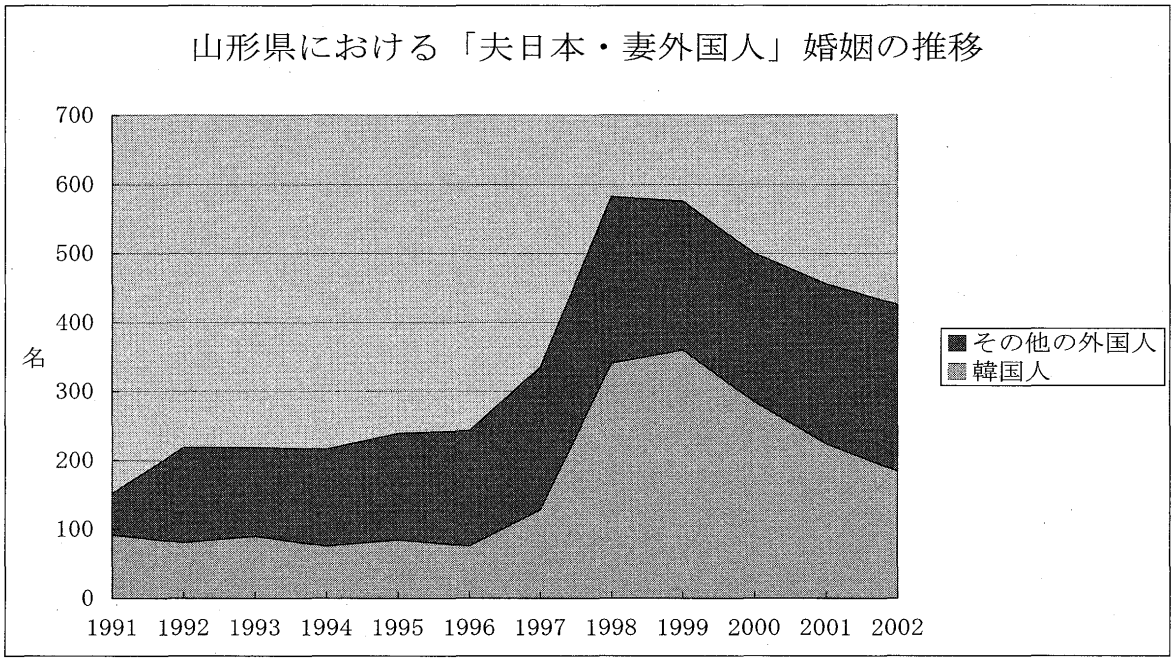
本論文ではインタビュー調査（1次､2次）のデータを主に使用するが､必要に応じてアンケート調査の結果（特に「日本の生活における葛藤」と「その解決方法」に関する部分）を用いる。現地では一次調査で知り合った人望の厚いキー･パーソンのE氏[8]の全面的な協力を得、主に調査対象者の家や店舗でインタビュー調査を行った[9]。調査言語は韓国語で行われ、録音を許諾した人については録音後テープ起こしをし、許諾しない人についてはメモを取った後に整理する方法を取った。

3　韓国人妻の国際結婚の背景とその特徴

山形県に居住している韓国・朝鮮人の数（外国人登録者数）は2004年12月末現在2,081名[10]で、同年の全国在日朝鮮・韓国人総数607,419名の0.3%にあたる。戦前戦中に移住してきたオールドカマーとしての在日朝鮮・韓国人は比較的に少なく、同地域における「外国人登録者数」の中の「在日朝鮮・韓国人」の増加は80年代以降日本人との婚姻のために来日したニューカマー韓国人女性がその大半を占める[11]。

山形県における韓国人妻の総数は2002年現在1,700名で、図1が示すように、1997年から1998年にかけて急増している。その理由の一つとして1997年の「アジア通貨危機（韓国では「金融危機」と呼ばれる)」をあげることができる。この1997年の通貨危機は、韓国の中間層を中心に失業率の上昇をもたらし、社会的不平等が拡大した[12]。山形における韓国人女性の流入もまた、この経済危機を1つの背景としていると考えられる[13](図1)。

＜図1＞



出所：　厚生労働省『人口動態統計』各年度版より作成。
注　：　当該年の1月1日から12月31日までの間に提出された婚姻届出件数を表す。

山形地域に居住し、医者として外国人妻のストレスの問題に取り組みながら支援活動を展開してきた桑山は、在日韓国人の特徴として、他の外国人妻との比較で次の三点を挙げている（桑山1995：68)。第一は年齢層の高さ、第二は学歴の高さとそれに見合った専門的職業に従事してきた経歴の持ち主が多いこと、そして第三は、ソウル及びその近郊を中心とした都市部出身者の多さである。このような特徴を説明する要因として、桑山は、「適

齢期」を越えた女性に対して韓国社会が加える「結婚圧力」を指摘している（桑山 1995：69-70）。また、笹川、中澤は、韓国における職場と家庭双方における女性の地位の低さ――「結婚退職制」を含む早期定年制と家族法上の不安定さ――や、また離婚女性の再婚の困難さも女性の海外移住を促進する要因として指摘している（笹川 1989：230-233、中澤 1996：89）[14]。

4　韓国人妻の結婚直後における世帯内地位

日本の農村生活において外国人妻が抱く不満は文化の差だけでなく、農村部特有の家族構造における自身の世帯内地位の問題に関連している。すなわち、嫁・姑舅との摩擦、3世代・4世代同居の問題、とりわけ経済制度に対する疑問、妻や夫の自立の問題である（渡辺 2002：27-28）。

本稿における調査対象者の場合はどうか。インタビュー調査結果の分析に入る前に、60名を対象としたアンケート調査結果を通じて日本生活における葛藤についてその全体的な傾向をみておきたい。「今までの日本での生活を通じて、次のような事柄について葛藤を感じたことはありますか」という質問に対し、「配偶者及び日本の家族との葛藤」を選んだ人が28名（47%）で最も多く、「同国人との葛藤」が7名（12%）、「隣近所との葛藤」が2名（3%）で、「その他」14名（23%）、「無応答」9名（15%）ある。ほぼ半数に近い女性が「配偶者または日本人家族との間の葛藤」を感じていると答えている。

それでは、韓国人妻は具体的にどのような葛藤を抱えているのか。面接調査事例の中から、さきに桑山が指摘した三つの特徴を備えた人びとを抽出して三つの例を挙げる。

A（高卒、1995年来日、来日時42歳）は、結婚3年目（23歳）に韓国人夫が交通事故に遭い寝たきりとなり、11年間看病に明け暮れた。夫の死亡後、韓国と日本を往来していた知人女性の紹介を受けて現在の夫と知り合い、1995年度に結婚した。来日後の結婚生活は「存在感のない」夫と「気難しい」舅、「偏屈な性格」の姑との葛藤に悩まされるものだった。

> （Aさん）舅は悪い人ではないが性格が気難しかったの。何事にも口を出したがるし、自分流でやらないといけない人だからね。夫はそのような舅に対してはいつも自信がなかったわ。「お前は何もできない！」と常にののしられて萎縮していた。それに姑は偏屈な性格。夫も私とは再婚だが、前の（日本人）嫁は姑の性格に耐えられず家出をしたんだって。舅が姑に暴力を振るっていたみたい。それで姑は嫁に当たっていたかもね。結婚直後、夫は私が両親の性格に耐えられないと思ったのか、「両親と別に暮らしてもいいよ」といってきたの。でも私が反対したわ。「大丈夫よ！私がうまく（舅の性格を）治してみるから」ってね。娘さんたちも親の性格にはお手上げだったからね。

舅は物知りであり何事にも口出ししたがる。またAがきつい言い方をしても「びくともしない」という。

舅の力が強いのはB（大卒、1998年来日、来日時33歳）も同様である。Bは大卒で自営業をしていたが韓国人夫との離婚を契機に来日し、現在の夫と結婚し前夫との間の二人の子供（7才、5才）を呼び寄せた。舅は財産家で、物知りとして知られ、世帯内では家族に君臨する存在であった。

> （Bさん）舅は厳しい性格で、保守的な人なのよ。もちろん家計も（舅が）管理していたわ。姑も夫も絶対的に従順にしていたみたい。私にもそれを望んだわ。このイエにあわせろってね。最初は努力もしたのよ。だけど無理！とりわけ食べ物。今までキムチを食べてきた私がすぐ変わるのは無理よ。韓国の食べ物を一緒に出したの。そしたら、食卓をひっくり返したわ。「こんなもの食えるか」ってね。

C（大卒、1994年来日、来日時31歳）は漢方医の韓国人夫の複雑な女性関係が原因で離婚した。離婚後韓国では日本料理店でマネージャーとして働いていたが、子供を夫側にとられ会えない孤独感のためにつらい日々を過ごしていた。友人の紹介で現在の夫を紹介され、1年間の交際後来日して結婚した。結婚後は同居する姑との強い葛藤に悩まされた。

（Cさん）姑は一人っ子の息子を嫁に取られたという嫉妬から何も気に入ってくれなかった。子供（現在の夫との）も要らないって。「あなたの全部がいや！韓国へ帰れ！」っていうの。7年間も続いたのよ。息子（夫）が出勤した後、2階にある私の部屋に来て「鬼だ！鬼！」と私をいじめるの。私が怒ると隣の家に逃げて「嫁が私をいじめる」と出てこないの。我慢できず（私は）夫を呼び出してよく夫に八つ当たりをしたのよ。

以上三つの事例においては、韓国人妻と夫側両親との葛藤が夫婦間の葛藤にも広がっており、従来からある「一方的に抑圧される<外国人花嫁>」の典型のようにもみえる。しかし、本稿は新たにいくつかの視点から分析を加えたい。まず、彼女たちが強い葛藤関係の中にいるにもかかわらず、離婚をしないで結婚生活を継続している理由は何かという点である。「交際を通じて夫がよい人とわかったので結婚した」（A、C）、「舅や姑の性格が大変だったけど、夫がかわいそうで帰れなかった」（A）、「韓国に帰っても居場所がないことも事実だけど…夫がいい人だから我慢できた」（C）という表現からは、彼女たちが国際結婚や移住の決断を、自身の韓国内の境遇と照らし合わせた結果、主体的におこなったことを示しているように思える。次に、世帯内の葛藤として従来強調されてきたのは「嫁･姑の問題」であったが､舅の強い発言権がもたらす葛藤も少なくなかったという点である。ここには日本、とりわけ農村部における「世帯内ジェンダー秩序」と「外国人妻」という人種・民族のヒエラルキーが交差した問題があり、この点についてはより多くの事例調査と日本、及び韓国におけるジェンダー秩序の双方を踏まえた考察をしていく必要がある。

5　日本の家族内葛藤における交渉とジェンダー関係の再編

それでは韓国人妻は、「配偶者及び日本の家族との葛藤」について、どのように交渉し解決を図ろうとしているのだろうか。本章の調査対象者の語りを分析する前に、韓国人妻が葛藤を克服する過程で起こりうる「交渉」概念について触れておきたい。Kandiyoti（1988）によれば、サハラ砂漠以南のアフリカと中東およびアジアの異なる性格の家父長制システム下では、家長および夫との関係において異なる類型の交渉が行われるという。このようなKandiyotiの概念を援用して篠崎は、主にドイツにおいて家事労働に従事しているフィリピン人とドイツ人雇用者との交渉方法を検討し、こうした交渉に「ジェンダー秩序、人種、生活・労働の取り決め、職業的アイデンティティが重層的に作用する」と論じている（篠崎 2003：33）[15]。本稿の対象である韓国人妻が夫側の家族と交渉する過程においても、個人が置かれた韓国や日本での環境はもちろん、両国におけるジェンダー秩序、人種･民族のヒエラルキーなどが重層的に作用すると思われる。

インタビュー調査結果の分析に入る前に、二次調査時のアンケート結果によって調査対象者の全体的な傾向をみると以下のようである。「夫または夫の家族と葛藤があるときに主にどのように解決されますか」という質問に対し、「結果的には私の主張どおり解決される」とした者が30名（50%）で最も多く、「どちらともいえない」が17名（28%）、「夫または夫の家族の主張どおり解決される」が5名（8%）、「その他」が8名（13%）という結果であった。半数の韓国人妻は自らの主張が通ると答えており、従来の「一方的に抑圧された外国人妻像」とは大きく異なる結果が現れてきたといえる。以下では面接調査で明らかになった韓国人妻の日本における家族との交渉方法を具体的にみていくことにする。

先述のAは日本語を独学で習得し、意思疎通が可能となるにしたがって舅の「一方的な性格」を直すことを試みるようになった。

（Aさん）舅の性格を直さないといけないと思うようになってからは強く対応したわ。何でも口を挟みたがるし、教えたがる舅に「オトウサンは「刑事」ですか？なぜそんなに何でも知りたがるんですか？」と強く反発したの。

舅は「異常な行動」[16]をするときがあるが、それがAに対して「関心を持ってほしい」という行動だとわかってから、Aは「適当に」対応するようになった。「聞こえなかったふりをしたり、日本語がわからないふりをしたら、面白くなくなったのかそれほど口を挟まなくなった」と語る。Aは舅に対して明確に自己の意思を伝え、世帯内

の地位の向上を図ろうとしていることが分かる。
次に彼女がとった行動は家事を全部自分でこなすことであった。

（Aさん）まず家の掃除をしたの。姑が長いあいだ入院していたから家はとても汚かったわ。3ヶ月もかかったのよ。柱も壁も時間をかけて拭いたわ。大変だった。そして日本の料理を習った。漬物の作り方を舅に教わったわ。最初は別々に食事をしたけどこれじゃいけないと思ったからね。日本の料理ができるようになったら舅が台所に入らなくなったわ。今は漬物とキムチを一緒に食卓にのせるが、他のおかずはほとんど韓国式になったね。

家を掃除し、料理を習うといった行動についてAは「私が楽になりたいから」「私が食べたいから」と表現するが、その一方で日本の料理を習ったのは「日本人の嫁としての役割を果たすため」であったともいう。
また、Aは運転免許の取得にも乗り出した[18]。

（Aさん）免許は学校に通ってから一ヶ月ほどで合格したの。寝る時間を惜しんで頑張ったのよ。周りの人は期待しなかったが、一回目で受かってから舅の態度が変わったわ。周りの人に自慢しているの。そのときだったと思うわ。私を認めてくれるようになった。（中略）ある日金庫を持ってきて「これからは管理してくれ」といったの（中略）そういったところをみて夫も変わり始めた。「自己表現」をするようになったのよ。ある日、夫が舅に反発していたの。理由を聞いたら「昔反抗できなかったのを今やってるんだよ」という。

さらにAは、入院している姑を退院させ、家で看病することを決断した。舅や夫は反対したが、少しでも家で生活させてあげるのが「嫁の道理」と考えたし、韓国での11年間の看病経験で自信があったからである。Aは、舅が彼女を認めるようになったのは、日本語を勉強し、運転免許も取得し、姑を精一杯看病する様子をみたからだと感じている。「この子は本気でここで生活していく人、と考えてくれたみたい」と語る。Aは、自分の意思を明確に示し舅に対しても「言うべきことははっきり指摘して」変容を迫っているが、同時に大きな衝突を避けながら世帯内における嫁役割を充分に果たすことで、世帯内の地位を向上させようとしている。このような「交渉」方法を、本稿では仮に「消極的交渉」と名づける。
Aが「話し合いで注意」したことに比べると、Bは、より積極的に舅と衝突して葛藤関係を乗り越えている。

（Bさん）（何回か食卓をひっくり返された後は）どうしても我慢できなかったわ。道端に出て大声で泣きわめいたの。「舅が外国人嫁を虐待する」とね。恥ずかしかったのか舅が「家の中に入って話そう」って。それ以来、食卓をひっくり返すのはなくなったわ。

Bはそのような行動を選択した理由として「恥でもかかさないと舅の癖は直らない」と思ったことと、「場合によっては過激な行動も取ることのできる強い嫁」ということを示す目的があったと語る。このような正面きった衝突は、感情表現が日本人より直接的であるといわれている韓国人にとってまれな行動とはいえない。Bは「何としてでも舅の性格を変えて日本で暮らしたい」という気持ちだったという。次にBは「舅と息子との距離を作って」「夫を教育する」ことに乗り出した。

（Bさん）親のいる家を出て独立したの。同居すると今までの生活が変わらないと思ったから。夫と舅との距離を置くことによって、今まで夫が「絶対服従」できた行動について「これからは状況を考えて行動するように教育した（笑）」という。

親との別居を果たした後、彼女は来日前からの夢であった日本で店を開くという計画を夫に打ち明け協力を求めた。

（Bさん）夫に「韓国人が多いわりには韓国食品店が少ない」と話して説得したの。最初はあまり真剣に聞かなかった夫も少しずつ私の話に耳を傾けるようになったわ。夫が職場をやめて社長になったら「どうか息子だけは職場に通わせて...」と舅が頼むの（笑）。でも、日本でも韓国でも夫の協力なしに外国人女性が一人で（自営業を営むのは）無理だからね。

Bは、店を開くために積極的に行動した。社長は夫だが、実質的な経営者はBで、韓国からの輸入・販売まで直接掌握している。事業が軌道に乗り、韓国人だけでなく日本人の顧客も多くなったため、今では舅も彼女の経営手腕を認めている。
次はCの事例である。彼女は姑と世帯内の役割分担を決めることによって葛藤を克服した。

（Cさん）家には姑がいるから、家にいるのがいやで仕事を始めたの。家のリフォームのために収入も必要だったしね。たまに韓国にいる子供にお小遣いも渡せるし。いろんな仕事を経験したわ。漬物工場、サクランボもぎ取り、遺跡掘り、人材会社の派遣社員、お弁当工場、販売職など…（中略）…姑との関係がよくなったのは3年前（来日7年後）ぐらいから。私が職場に行くために外に出ると姑は家事をしてくれたの。それがお互いにちょうどよかったわ。お互いの役割を探したという。今はお互いがいないといけない間柄になっている。たまに心配になるの。姑が急にいなくなると困るなってね。

Aの「消極的交渉」と比べると、BとCは夫家族と激しく対立しつつ結果的には衝突を乗り越えて舅や姑との葛藤を解決している。また、就労や起業することにより社会参加や家計への貢献を実現したことから、舅や姑による評価を高め、世帯内の地位を向上させることに成功している。BとCのようなケースを、本稿では仮に「積極的交渉」と名づける。

6　結びにかえて

以上、韓国人妻の世帯内ジェンダー関係の再編過程を検討してきた。本稿の対象となった山形地域の農村在住韓国人妻たちの特徴として以下の3点を指摘しておきたい。

第一に、彼女たちの特徴として「年齢層の高さ」、「高学歴」、「キャリアの所有者」、「都市出身者の多さ」のほかに、韓国における婚姻をめぐるトラブル（離婚・死別・高齢独身など）が来日にいたる直接的な要因となっていることがクローズアップされてきた。またそれと同時に、上記の要因が、彼女たちが就労や起業などの社会的経済的自立を図るときの重要な社会的資源となっていることが明らかになってきた。

第二に、彼女たちは日本人夫と結婚した直後の世帯内の地位とジェンダー関係において葛藤を抱えている者が多かった。葛藤の要因は、夫よりむしろ夫の両親との関係にあり、姑だけでなく舅との葛藤も少なくなかった。

第三に、韓国人妻たちの中には、日本での生活が長期化するにつれて、自身が持つ社会的資源を最大限に活用し、主体的な「交渉」によって世帯内の地位向上を実現し、世帯内ジェンダー関係の再編を進めている場合がある。彼女たちの「交渉」方法を、先述の三つの事例を用い、試論的に類型化してみると次の二つに分けられる。一つは「消極的交渉」で、Aが該当する。世帯内においては「望ましい嫁役割」を遂行しつつ、姑や舅に対して「直すべきことについては明確に注意」している。もう1つは「積極的交渉」で、BとCが該当する。ともに舅・姑と激しく衝突したのち、起業により独立した生計を営み、就労により家計を支えることを可能とした。3人の女性は国際結婚によって日本の農村部で生活を営むようになり、国籍による偏見と嫁役割の押しつけという二重の葛藤に悩みながら、主体的に解決の道を探り、家族関係を再編し、世帯内における自身の地位を向上させている。起業や就労を通し、経済的自立や社会進出を実現している者もいる。こうした一連の行為を、彼女たちの日本への定住過程の一部として読み解くことも可能である。しかし、それはそのまま日本社会への一方的な同化の志向を意味するものではない。彼女たちは日本社会への順応を試みつつ、一方の軸足を出身国である韓国から離さず、二つの社会に拠点を形成して自身の居場所作りや経済的社会的地位の上昇に取り組もうとしているのである[19]。

最後に本稿の限界と新たな研究課題について触れておきたい。本稿では「交渉」を通じて良好な関係を作りえ

たケースだけを紹介したが、破局を迎えた事例も存在する。また、韓国人妻たちの「交渉」のあり方は、本稿の事例にとどまるものではなく、その形態は多種多様である。日本で生活する外国人妻がどのように世帯内の地位を向上させ、社会的な地位を確保することができるのか、さらに彼女たちの主体的な取り組みを、行政サイドを含めた地域社会がいかに支援していけるのか、同国人のネットワーク形成がどれだけ寄与するかなどの諸点については、今後より多くのケースを通じた調査対象者の内面に踏み込んだ分析が必要とされる。さらには、彼女たちの子育て支援（韓国・日本双方で生まれた子供達）の問題や子どもたちへの母国文化の継承など視点からの考察も必要とされよう。こうした点については、今後の課題としたい。

付記

本稿は第53回関東社会学会発表原稿（2005年6月18日-19日）を大幅に加筆・修正したものである。なお、本稿が基づく調査研究は松下国際財団の研究助成（2003年度）を得ておこなわれた。本研究を支援してくれた財団と、調査、研究に協力してくれた山形県在住の韓国人妻の方々、さらに関係諸機関の皆様に心より感謝する。また執筆にあたっては査読者から貴重な助言をいただいた。謝意を記したい。

注

1　ただし、伊藤の議論は主にフランスに居住する北アフリカ出身移民男性が、定住の過程で妻を呼び寄せ、同じエスニシティに属する者同士の家族が問題となっているのに対して、本稿では日本人男性との国際結婚によって、韓国人女性が日本の農村部の家族に編入する事例が対象となっている。

2「定住」した移民が出身社会との社会・政治・経済関係を維持しながら独自の社会空間を展開するというトランスナショナリズムの議論において、最近「ジェンダー視点」を導入した議論が活発に展開されている。

3　鈴木は農村外国人花嫁像に対して類似した評価をしている。すなわち、移民女性および国際結婚に対して個人とは完全に隔離した外的原理、つまり経済、政治、社会慣習または歴史のような点で分析することと、当事者と表象を「各種の搾取・欺瞞の一義的な＜犠牲者＞または＜加害者＞とみなす考察、さらには宗教などある特定の行政・イデオロギー的立場からの解釈が中心となっている」と評価する（鈴木1998：97）。

4　仲野はこのような現象について、外国人妻を抑圧している日本農村の社会構造が現実にムラに存在していることを必ずしも否定するものではないが、彼女たちにまつわる言説そのものが独り歩きしてしまっていることは事実であるという（仲野1998：93）。

5　実際の調査では必ずしも「交渉」段階において、両方の関係が良好に進まなかったケースもみられたが、今回は良好関係に発展したケースについて取り上げたい。

6　調査対象者のプロフィールの中で来日時の年齢や学歴、婚姻歴については以下のようである。なお、この3点は、山形における他のアジア出身外国人妻に比べた場合、来日時の年齢の高さ、比較的に高学歴、離婚経験者の多さなどと一致する。

表1　来日時の年齢

21-25歳	26-30歳	31-35歳	36-40歳	41-45歳	46-50歳	50歳以上	合計
1	9	11	16	10	11	2	60(名)

表2　来日前の学歴

中卒	高卒	短期・専門大卒	大卒	合計
10	33	8	9	60(名)

表3　来日前の婚姻歴

離婚歴あり	婚姻歴なし	死別	合計
38	21	1	60(名)

7　このうち10名は1次調査時に出会った女性との再会である。

8　E氏は自家用車を使って各対象者を紹介し、場合によっては共に食事、就寝をしながら全面的に協力してくれた。

9　山形における韓国人妻に対してランダムにアンケート調査するのは事実上困難である。そのため、知り合いや関連機関（たとえば山

形在住のＩＶＹ）の紹介による雪だるま式調査方法に頼らざるを得なかったったが、Ｅ氏のような人望の厚い人を介した調査が可能になったため、かえって深みのある調査になったことは特筆できる。

10　外国人登録者数は法務省の推計によるものと山形県国際室による集計の２種類がある。集計の方法に違いがあるため同時期でも数字は一致しない。たとえば、国際室の集計によると 2004 年 12 月末現在、在日朝鮮・韓国人の外国人登録者数は 2,071 名である。ここでは他の地域との比較のために法務省の推計による数字を引用することにする。

11　韓国居留民団の山形支部関係者の面談。

12　韓国人はこの時期を「IMF 時代」とも表現する。韓国の失業率は 1999 年２月には 8.6% まで上昇したが、その後の経済指標は好転し、失業率も同年秋以降 4% 台に低下した。しかしながら、このような過程を通じて韓国内の貧富の格差は拡大された。韓国の金融研究院が 99 年 11 月９月に発表したデータから、都市勤労者の階層を 10 段階に分けて、1-3 までを下位層、4-7 を中位層、8-10 を上位層とした場合、上位層の所得を 100 にし、中下位層の所得水準を比較してみる。85 年下半期に中位層 48.09、下位層 26.09 であったのが、97 年下半期には各々 54.54、29.77 と格差が縮小した。しかし、通貨危機後、格差は再び広がり、99 年上半期には同じく 48.75、24.88 に、85 年当時の水準まで所得水準は下がった（東亜日報社 1999 年 11 月 10 日付）。

13　山形県支部の韓国居留民団関係者によれば、この時新規参入した韓国人妻が最も多かったという（2003 年度のインタビュー調査における面談）。

14　データはやや古いが、こうした状況について笹川は、1）大都市（ソウル）における未婚女性人口の相対的な多さ、2）女性の経済的基盤の弱さ、3）家族法における女性の地位の低さ、4）「適齢期」概念の強さと再婚の難しさ、の４点を指摘している（笹川 1989：230－233）。

15　なお、篠崎（2003）はフィリピン人家事労働者とドイツ人雇用主との間に三つの交渉類型を見出している。第１類型は「人種、ジェンダー秩序、学歴が重層的に作用する直接的な交渉のあり方」、第２類型は「ジェンダー秩序にかかわる愛情の操作によって可能になる間接的な交渉のあり方」、第３類型は「＜家事サービス供給者＞としての職業的なアイデンティティが交渉の際に真正面から押し出される、雇用者との直接的な交渉のあり方」である。本稿はこうした篠崎の議論からヒントを得ている。

16　Ａは、「舅が病院の６人部屋に入院したことがあるが、自己主張が強いし看護婦にあまりにもしきりに話しかけるため一人部屋に移された」前例を話しながら、人から関心を持ってほしい舅の行動をこのように表現する。

17　韓国人妻が結婚後に大掃除をするのは他の女性からもよく耳にする。結婚や引越しなどを通じて新生活を始めるとき、壁紙を張り替えるなどまず家をきれいにするのは韓国でもよく行われている。

18　彼女は結婚が決定後に独学で日本語を勉強した。

19　伊藤（2004:122）は、日本在住フィリピン人妻の事例調査を通じて、「彼女たちの取り組みが日本への同化ではなく、＜バイカルチュラリティ＞の創出に伴う交渉がアイデンティティ形成の中に含まれる」と指摘した。

参考文献

伊藤るり 1998,「国際移動とジェンダーの再編――フランスのマグレブ出身移民とその家族をめぐって」『思想』第 886 号，60-88.

――――，2004,「脱領域化するシティズンシップとジェンダー規範」『現代日本社会における国際移民とジェンダー関係の再編に関する研究――女性移住者のエンパワーメントと新しい主体形成の検討にむけて』（研究代表者：伊藤るり）、科学研究費補助金（基盤研究 C）研究成果報告書，109-126.

小ヶ谷千穂，2000,「移住女性研究の展開と課題――アジアにおける移住女性のために」お茶の水女子大学社会学研究室『Sociology Today』第 11 号，99.

――――，2004,「滞日フィリピン女性の社会活動の多層性」『現代日本社会における国際移民とジェンダー関係の再編に関する研究――女性移住者のエンパワーメントと新しい主体形成の検討にむけて』（研究代表者：伊藤るり）、科学研究費補助金（基盤研究 C）研究成果報告書，29-52.

Kandiyoti, Deniz, 1988 "Bargaining with Patriarchy", *Gender & Society*, 274-290.

桑山紀彦，1995,『国際結婚とストレス――アジアからの花嫁と変容するニッポンの家族』明石書店.

Constable, N., *Maid to Order in Hong Kong*. Ithace: Cornell University Press, 1997.

笹川孝一，1989,「韓国からの＜花嫁＞と異文化交流――＜国際識字年＞を前に」佐藤隆夫編，『農村と国際結婚』日本評論社，217-267.

佐藤隆夫編，1989,『農村と国際結婚』日本評論社.

篠崎香子, 2003,「＜矛盾した階級移動＞をめぐる３つの交渉の類型――在独フィリピン人移動家事労働者の事例から」『ジェンダー研究』第７号（通巻 24 号），お茶の水女子大学ジェンダー研究センター，31-52.

渋谷敦司，2002,「茨城県におけるタイ人女性と国際結婚」茨城大学地域総合研究所『国際結婚におけるタイ人女性の現状』（委託調査報告書），41-64.

宿谷京子，1989，『アジアから来た花嫁』明石書店．

鈴木伸枝，1998，「首都圏在住フィリピン人既婚女性に関する一考察——表象と主体性構築過程の超国民論からの分析」『ジェンダー研究』第1号，お茶の水女子大学ジェンダー研究センター，97-112.

Marta Tienda and Koren Booth. 1991, "Gender Migration and Social Change" *International Sociology*, Vol.6, No.1, 51-72

中澤進之右，1996，「農村におけるアジア系外国人妻の生活と居住意識——山形県最上地方の中国・台湾・韓国・フィリピン出身者を中心にして」『家族社会学研究』第8号，89.

仲野　誠，1998，「<外国人妻>と地域社会——山形県における<ムラの国際結婚>を事例として」『移民研究年報（4)』，92-109.

黄　達基（ファン　ダルギ），1993，「日本農家後継者の<国際結婚>——その実情と問題点」『日本学報』第30号（韓国語），467-491.

Hondagneu-Sotelo, Pierette, 1994, *Gendered Transitions: Mexican Experiences of Immigration*, Berkeley, Los Angeles, and London: University of California Press.

柳蓮淑，2006，「外国人妻の主体性構築に関する一考察——山形県在住の韓国人妻の事例から」『桜美林論集』第33号，119-133.

渡辺雅子，2002，「ニューカマー外国人の増大と日本社会の文化変容——農村の外国人妻と地域社会の変容を中心に」宮島喬・加納弘勝編，『変容する日本社会と文化』東京大学出版会，15-39.

（2006年1月10日受理）